第１１回せんがわ劇場演劇コンクール講評

～オパンポン創造社『サンセット』～

銀粉蝶

生（ナマ）で観たら楽しいだろう、もっと笑えるだろう、と期待していましたが、そこまでにはいたりませんでした。
『人間』への視点があまりに通俗的だと思います。
人ってバカでコッケイでかなしくておかしいなんてことはもはや誰もがわかっていることだから。
この作家ならもっと深みにハマったものが書けるのではないかと思います。
グランプリをとれなかった理由を知りたいとおしゃってましたが、『射程距離の遠さ』でしょうか。
スケールが違いました。

多田淳之介

唯一、一次審査と同じ作品ということで作品のクオリティーも保証されいてたので上演も楽しみでした。
アフター・ディスカッションでも、「なるべくくだらない、中身がないものをやりたくて作った」と仰ってましたけど、中身がない話をするのは悪いことではありませんが、演劇になった時に中身がないという事の意味が必要になってくるので、その意味までは感じられませんでした。
ボタンを押す彼らが、その場の緊張をほぐすために話すという事はとても理解できましたが、彼らの環

境を忘れるほどその会話をだれも楽しんでいないという時間の持たせ方が、もうちょっと欲しかったなと思います。
劇場での十分な準備もできなかったとは思いますが、俳優さんも映像の時のほうがコンディションがよかったんじゃないかなと思いました。中身のない会話というのは、「俳優でいかに見せていくか」もあるので、そこには至らなかったと思います。
何か一つ場をキープできるものや状況があると、どんな無駄な話をしていても成立すると思います。それは演出をどう届けるかという話になるのですが、もう一歩先のこの「人間とは何か」という解釈があるといいなと思いました。作家の視点に対するもう一つの視点がないと、戯曲で書いたことを立ち上げることに留まってしまうので。
グランプリにはならなかった理由として、戯曲と上演のギャップや伸びが感じられなかったことはあると思います。良い戯曲なのでいろんな形での上演や他の演出家での上演、高校生版なども良いんじゃなかと思いました。

西尾佳織
私は「笑い」に憧れているので、まず一次審査の時にすごくいいなと思いました。
「劇作家賞を誰にするか」という時に、私はオパンポン創造社さんを推していました。好きなラインとはちょっと違うんですけど、巧みに書かれていると思ったので。劇作家賞はほろびての細川さんになったのですが、（ほろびてさんの講評でもお話ししたように）私は『あるこくはく』は確かに良かったけれど

いろいろと瑕疵もあると思っています。その点、オパンポンさんの戯曲は「ちゃんと」していると思いました。戯曲を他者に渡すものと考えたときに、「ちゃんとしてる」って大事なことだと思います。ただし、新しいだろうか？この戯曲を、人間の鈍感さに対する警鐘だと思って読んだのですが、「そこから先に行けているか？」ということが審査では問題になって、今回は劇作家賞ではないんじゃないかということになりました。
戯曲がよかった反面、（アフター・ディスカッションでも言いましたが）上演では音量の調整がうまくいっていないと思いました。野村さんが仰っていた「無理をしている」という状況は、もちろん説明としては分かるのですが、早い段階で声量の閾値（しきいち）を超えてしまって、観客が取りに行かなくてもどんどん与えられる状態になってしまったように思います。
後半の、シーン…として誰も喋らない時間がキモだと思ったので、そこに効果を持たせるためにも、大きい声の中にも何種類もの声があっていいんじゃないでしょうか。単に大きいか小さいかではなく。
この戯曲が書かれた時点で、野村さんがどのくらい上演の形態をイメージして書かれていたか分かりませんが、笑いや声の調子の調整がこの『サンセット』という戯曲に対してなされているというよりは、コント、と言うとちょっと違うかもしれないんですけど、形式で初めから決まってしまっているような感じがしました。本が面白いと思った分、この本を立ち上げるための演出と俳優の演技には、もっと違った細やかな塩梅があり得たように思います。

ムーチョ村松

死刑執行人、ボタンを押す人という題材がまず素晴らしい。僕も死刑制度、死刑囚などの題材は興味があり、ドキュメンタリーや海外の番組などいろいろなものを観ました。3 部作ということで、他のも俄然見たいという気持ちになりました。完成度もクオリティーも高い、とても面白いなと思いました。ただ、もっと面白くなりそうだな～。はじめ（一次審査で）ビデオを見た印象と生で見た印象で、絶対もっと面白いんだろうなと思いました。それは、今日の出来具合なのか、戯曲的はとても素晴らしいので本番でやるという事でもっと面白いんだろうなと思っていました。もしかすると、笑いに対するウエイトが大きい 30 分、40 分を確保したいということならこの題材ではないのかなと思いました。他のバージョンも観てみたいなとも思います。状況を選び、造るセンス、着眼点は本当に素晴らしい、成功だと思います。
だから、このテーマのドキュメンタリーは辛かった悲しかったなどの後日談になりがちで、今回、そうでない切り取り方の戯曲を読んで、本番を観たらもう少し胸に迫るものがあるかと期待したので、そこが弱かったのが残念でした。もったいないな～と思いました。また、（俳優の）パワー押しが強すぎて、その中で仕切り直しが 3 回くらいあったと思うのですが、すべてが同じパワーだった。本番が単調だった、本当はきっともっと面白いんだろうな～と思いましたね。

徳永京子

この作品から感じた「人間は悲しいくらい滑稽な生き物です」や「繊細と鈍感のバロメーターのズレが人間の個性であり、悲劇も喜劇もそこから生まれる」といったことは、確かに真実だけれど、もうわかっているんだけどな、というのが正直な感想です。それ以上のことが描かれていたのかもしれませんが、だとしたら上手く伝わって来ませんでした。

悲しいから、怖いから、黙っていたら叫んだり泣いたりしてしまいそうだから、大声でバカ騒ぎをする。それはよく理解できるんですが、そこを飲み込んだとしても、ふたりがバカ騒ぎの下に抱えた悲しみや恐怖は、時間の経過、また相手の反応や３人目の登場などによって、刻一刻と変化するのが当然で、声の張り方や表情、話題の変え方はこまやかに変わってくるはず。それこそが人間ではないかと思います。それがずっと一本調子で話も同じところを回り続けるので、１度、「この人達、本当はつらいんだな」と気付くと、その先がなかった。そこから「でも本当の本当は楽しんでいないか」「と思ったらやっぱり……」といった変化があれば、人間の奥の奥を見せてもらったとこちらも上手くだまされ、あの狂騒的な踊りもずっと効果的に感じられたと思います。

撮影：青ニ才晃